

サザン
スクール

高樹のぶ子

SOUTHERN SQUALL

Nobuko Takagi

①

日本経済新聞社

サザ

ズ

コ

ー

ル

高樹のぶ子

SOUTHERN SQUARE 工業学院図書館

Nobuko Takagi

(1)

蔵書章

日本経済新聞社

サザンスコール(上)

一九九一年六月十一日 第一刷

著 者 高樹のぶ子

発行者 樋口 剛

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五

郵便番号 一〇〇―六六

電話 〇三(三三七)〇二五一

振替 東京三―五五五

印刷 広研印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。

© Nobuko Takagi 1991 Printed in Japan

ISBN 4-532-17010-9

サザンスコール
(上)

一章

車輛の振動音が微妙に高まり、鼓膜に加わる空気圧が、一瞬重たくなった。

杉野隆三は文庫本から顔を上げ、窓の外を見た。地面が下の方からせり上がってきて、窓硝子はたちまち灰色の闇に呑みこまれた。地下鉄東西線は、ここ中野から、大都市の地下へと潜りこむのだ。

車内灯は、自然光のなかでは目立ちもしなかった夥しい数の色を、浮かび上がらせていた。濡れたように光る吊り広告の写真や文字を一瞥すると、彼はまた文庫本に目を戻した。サトウキビ畑に野球場をつくると、死んだ大リーガーたちが戻ってきて、夢のようなゲームを繰り広げる話である。だが、まだそこまで読み進んではいけない。最近映画になったらしく衝動買いしたもの、この二日間忙しくて五分の一も頁をめくってはいなかった。昨夜も高円寺の自宅へ帰りついたのは午前二時だった。そのぶん翌日の出社は遅くなる。

乗換駅の日本橋までのほぼ三十分間、隆三は落ち着いた気持で活字を追った。立ち上がって出口に向かうとき、いつもの癖で、窓硝子に映る自分の姿を横目で見た。太い首と広い肩が、水の中を動くよ

うにゆっくりと、彼についできた。

銀座線に乗換えて一駅目の京橋に、隆三が勤務する産洋レーヨンがある。ドアが開きプラットフォームに立つと、足はひとりでに改札口へ、そして京橋方面出口の五番へと向かう。

地上へ出るための階段へかかる一歩目は、いつも右足だということに気づいたのは、何年前だったか。途中に一個所踊り場があるが、そこまでの階段が十六段、踊り場から上が十八段である。

隆三は今年四十七歳になるが、この合計三十四段の階段を息も弾ませずに上りきる体力があった。踊り場など不要なくらいだ。

だがその日、彼はその踊り場で奇妙な思いにとらわれ、ほんの一瞬足をとめて見上げたのだった。

——俺にはもう、この十八段ほども残されてはいない。この踊り場が四十の年だったとすれば、残されているのはせいぜいあと十段だな。

頭上の出口から、白茶けた空が隆三を見下していた。上っていけば、右手に生命保険会社のビルと大手の製菓会社ビル、正面には鍛冶橋交差点の見慣れた風景が待っているはずである。ビル群はとりわけつめたくもなく、かといって好意的でもない、ホテルのドアマンのような機能的な表情で自分を迎えるだろう。そこには山や森や、火の屑をちりばめたような夕陽の海が待っていることなど、決してないのである。

こんなことをほんの一、二秒間考えたあと、彼は残りの階段に足をかけた。

このあたりの通りはすべてビルの谷間になっていて、風は一瞬ごとに方向を変えて走り抜ける。玄

関の前で出てきた女の子とぶつかりそうになった。

胸に茶封筒の束を抱えた彼女は、軽く頭を下げて道を譲った。淡いブルーの事務服の肩が、鳩の胸のように盛り上がっていた。

「おはよう。いやな風だね。これ、黄砂かなあ」

「あら、花粉ですよ、ぜんぶんぶ」

「嘘だろ」

隆三が振り返って白濁した空を見た隙に、彼女は悪戯っぽい笑いを残してすり抜けていった。その笑顔は、隆三を気持良くした。

事業開発本部長である自分に対して、ちょっとしたからかい気味の軽い冗談が言えるのは、こちらがそれだけ、やわらかい雰囲気を身につけているからに違いない――

隆三は、どこかに媚びをふくんでいなくもない女の子の気軽なひとことで、自らの若さを確かめた。実際彼は、同期入社の子の者の中だけでも、若く見えた。顔や首、腕などに年相応のたるみはみられたが、腹部はまだ締まっていたし、足の運びも衰えてはいなかった。仕事中や会議の席では、語尾まで明瞭に発音することをこころがける一方、それ以外ではつとめて部下を友人のように扱った。

これは研究室での共同作業を経験してきた技術屋には、さほど努力の要るものではなかった。隆三は本社に戻ってくる前は、北陸と九州にある二つの研究所勤めのうち、小田原の総合研究所の所長をしていたのだ。

合織のなかでも、いまもつとも開発が進められているのはポリエステルである。

隆三が本社に連れ戻され、部長から本部長へスピード昇進した理由は、彼が入社以来一貫してポリエステルを扱い、他社が次々と発表する新繊維についても、細かい判断が出来るからである。

隆三は、同期の誰よりも先に現在の地位を得たことに満足していた。敬して遠ざける式の上司でないことにも満足していた。

だが――

地下鉄の出口の階段で、ふいに自分を襲ったあの感じは何だったのか。

疲れとも虚無とも違う、何だか先へ進むことに意味がないような、何もかも見通せてしまったようなつまらなさだった。

机についた隆三は、手帳を広げた。七時に沖間八重と会う約束がある。

沖間八重から隆三に電話があったとき、彼は幼な馴染みから肩を叩かれたような懐しさを覚え、思わず深呼吸しながら椅子の上で大きくのけぞったのだった。

「どうしてる？ 元氣？」

「私？ 私なら相変わらず。主人は、少々疲れてきたみたいだけど」

「順調に行ってるんだろ、彼の仕事の方は」

「那覇と宮古島とを、行ったり来たりです」

「挨拶状をもらったよ。二つも工房を持っただってね」

「宮古の方は、全くの赤字よ。那覇だって、ちつとも儲かっちゃいませんけど。だって、織子さんに教えながらだし、ようやく一人前にしたら、独立されちゃうし。まあそれでも、本人は幸福そうだね、好きなことやってるんですもの」

「あなただって、生きいきした声で、全く羨ましいな」

「ちよつと頼みたいことがあつて」

「何か頼みでもなけりゃあ、昔の友人に電話なんかかけてこないと思つたよ」

昔の友人に、と言つたのは、他の社員の耳をはばかつてのことである。昔の恋人に、と言つた方がより正確かもしれないが、それもまた微妙なところだ。

沖間学と八重を奪いあつた学生時代が、突然時空を越えて眼前に浮かび上がってきた。すべては時の風化にあい、青春時代の懐しさのなかに溶けこんだかに見えるが、好きだった女が自分の親友と結ばれていたことを知らされた夜の敗残の記憶は、女への恋愛感情は去っても、水底に沈んだ硝子の破片のように、決して消えてはくれないものだ。

「頼みたいことは会つて話します。それより、隆三さんにどうしても見せたいものがあるの」

八重は急に、二十五年前の挑発的なところのある少女に戻つて言つた。八重は隆三より三つ年下だったから、今年四十四のはずだ。

「私、沖縄から何抱えてきたと思う？ 水と砂とモクマオウの木よ」

「あなたはいつまでも、年をとらない人だね」

「嫌味？」

「とんでもない。あなたの話し方は、手の中の宝物を全部ばらまいといて、自分で拍手してるみたいで、相変わらずだなと思っただけ。モクマオウを抱えてきたって？」

「織物なの、宮古の」

のけぞっていた隆三は、ゆっくりと上体を起した。

「上布ですけどね、いわゆる紺上布ではなくて、とても新しい感覚なの。一枚の着尺のなかに、海と砂とモクマオウが織りこんであるのよ。どう？ 見たいでしょう？」

午後は会議が二つ入っていた。ひとつは小田原の研究所の予算増額についてであり、もうひとつは、他社が出したニュー合織の製品への、市場の反応が報告される会議だった。

ピーチスキンと呼ばれる、桃の肌ざわりを思わせる布や、光の屈折でモルホ蝶の羽のようなあやしい光沢を浮かび上がらせる布など、合織にしか出せないものを、すべての繊維メーカーが模索し、市場に問いかけていた。

産洋レーヨンでも他社と足並をそろえ、これまでの合織からの脱皮を試みているが、他社の製品でも自社のものでも、おおむね順調にいつている。

沖間八重と会う予定があるからではないが、隆三は会議の席で、何度か沖間学のことを考えた。

京都での大学時代、隆三は学と毎日のように顔を合わせていた。同じ理学部で、天然物の化学的分

析を、専攻していたのだった。そして八重は、短大を卒業してその研究室で助手をしていた。

卒業と同時に学は大学院へ進み、隆三は産洋レーヨンの研究室に入った。一年遅れて、学も産洋レーヨンに来たのだった。そのときはもう、学は八重と結婚していた。隆三はまだ独身で、複雑な思いで学の入社を受けとめたのを覚えている。

結局一生涯、学とも八重とも付き合っていくことになるだろう。少々苦い味が残る二人との関わりだが、同じ会社のなかでうまくやっていくしかない、と覚悟を決め、そんなこだわりも消えかけたころ、学は産洋レーヨンを辞め、八重を連れて郷里の沖繩に帰ったのだった。

それが確か一九七四年だった。第一次石油ショックで、繊維業界が完膚なきまで叩きのめされた直後のことだった。

朝鮮戦争までの人絹ブーム、その後のナイロン、アクリルなど、作れば売れる合繊ブームが、冷水を浴び、社員の半数近くを失った時期でもある。

隆三は会社に残り、闘い続けた。だが学は、合繊に見切りをつけ、自分の趣味とも言っている沖繩の伝統織物の世界へ活路を求めたのだ。同じ時期、八重も那覇の松越パートに就職し、現在は婦人用品管理部の課長であり、専属デザイナーでもある。

夕方、八重と約束したSホテルのロビーに向かう隆三は、吹き荒れていた春の突風がやんだ薄墨色の大気のなかを、泳ぐように足を動かした。

八重への現在の気持は、親しい友達という以上のものではない。にもかかわらず、隆三は高揚を覚

えた。街に溢れる春色のせいかもしれない、と彼は自分を嗤った。

隆三はエスカレーターでSホテルのロビーに向かいながら深く息を吸った。地価の高い場所に建てられたホテルらしく、一階には公共のスペースがない。ロビーと言っても、広々とした喫茶ルームになっいて、金を払わない客は出入り出来ないようになっていた。

もともと隆三は、このホテルが気に入っていて、常々仕事にもつかっていた。

隆三は、水と安全はタダと思っている大半の日本人とは少し違っていた。この大都会の生活者として、一人の人間が一定時間、必要以上のスペースを確保するためには、相応の金を払うべきだと思っている。自分だけの空気を所有し、そこに誰も立ち入らせないために、金を払うのは当然だと思っている。

金は物を買うための紙きれだと考える人間を、隆三は一段低く見ていた。逆に目に見えないもの、かたちに残らないもののために金を使える人間が好きだった。

八重はつきあたりのソファで足を組み、水割りを飲んでいた。薄茶色のスーツの襟に、鮮やかな緑色のスカーフを巻き、べっこうの小犬のブローチでとめている。

立ち上がりとうとするのを制すと、八重はゆったりと座り直した。

「お先に頂いてます」

「私も同じものにしようかな」

ついできた女の子の、ロングスカートからわずかに目を上げて言った。

「いつこっちに出て来たの?」

「先週末よ。毎日、走りまわってるわ」

「こっちの本店に転勤なんてことじゃないんだろ」

「そりゃないわね、あつちの人と結婚してるんですもの」

顔全体に肉がついて、微笑する目は細く後退し、心の表情を隠してしまう。昔から、微笑が似合った。二十五年前はそれがただ、無垢であどけなく見えたのだったが、いまは同じものが、彼女の仕事上の武器になっているのが、隆三にもわかる。

「そうか、転勤じゃないのは残念だな」

「こっちでファッションショーを開きたいと思って。いい企画なのよ」

彼女の頼みというのは、サンプル屋と呼ばれる縫製の職人の紹介等で、隆三は何とか出来ると思う、と応えた。

「ありがとう、助かるわ」

ほっとした顔にアルコールの紅色の影がさし、同じ肌の色の指が、足元に置かれた紙袋を引き寄せていた。八重の相変わらず細めた目が、きらりと光った。

「ファッションショーなんですけど、こういうものを使いたい」

紙袋から引き出した長い棒状のものを、隆三の前に置いた。隆三はそれを手にとり、巻いた紙を剥がした。

「これは」

「着尺よ。宮古上布。この灯りの下では色目はよく判らないでしょうけど」

「いや、判るよ。しかし」

しかし、のあとに何を続けたかったのか、隆三自身にもよく判らなかつた。何か奇妙な衝動が生まれて、隆三の口をつぐませたらしかつた。

彼は、あらためてこう言った。

「いつも合織の布地ばかり触つてて、それに指先が慣れてるものだから、急にこういうものに触れると、女房以外の女の体みたいにどきつとしてしまう」

八重は愉快そうに、また満足げに、咽を鳴らせて笑つた。

隆三は、自分でもうまいことを言つたものだと思つた。だが、このたとは、正確ではない。隆三には、妻以外の女がいる。だがその女の体も、もはや彼をどきりとさせることはなかつた。

「あなたがこんな布をどう思うか、反応を見たかつたのよ」

「麻だろ、これ」

「ええ」

隆三はあらためてその表面に指の腹をつけて二、三度こすつた。麻を素材にした布とは思えない密度があり、しかも薄い。事実、テーブルの上のグラスが透けて見えた。それでいて、タテ糸ヨコ糸の存在を感じさせないということは、よほど細い糸で織つてあるに違ひなかつた。

隆三は思わず持ち上げて、においを嗅いだ。わずかに、生乾きの糊のにおいがした。

「麻を、こんなに細く紡ぐことが出来るの」

「宮古上布が究極の織物と言われるのは、紡ぎの技術のせいね。どう？ セクシーだと思わない？」

隆三も全く同じことを感じていた。

「しかし、宮古は紺上布じゃなかったの？ これはかすりでもない。縞だね」

「そう、縞よ。私と主人がいまやってることは、紺上布ではない、こういう新しい上布の紹介なの」

隆三は、沖間学の顔を思い浮かべ、あらためて布の端をつまみ直した。一瞬、この布がかつての恋敵だった学の、囲い女のように感じられ、不穏な思いが胸をよぎった。藍色と生成りの白ととろろ色、そして淡々とけむるような緑色の縞柄である。それぞれが、海と砂浜と浜昼顔の花とモクマオウの林を表わしているのだと、八重は説明した。

「デザインしたのも織ったのも、いえ、糸を染めたのも、二十歳の若い女性なの。見事でしょ。三カ月はたっぷりかかってるわね」

「これ一反で、三カ月か。大変だな。沖間工房の女性なの？」

「気になる？」

「別に気にはならないけど、学君の弟子の作品かな、と思って」

心の裡を見透かされたようで、隆三は軽い嘘をついた。こんな美しい布と三カ月も取り組む若い女に、一瞬興味を覚えたのは確かだった。隆三は繊維を生涯の仕事にしていながら、女が機織りする姿

を目にしたことがない。そんな図ともっとも遠いところにいる。

「宮古の工房の研究生だったけど、いまは独立させて、好きなようにやらせてる娘なの。ちょっと問題がある娘なので、その方がいいらしいのよ」

「ほう、問題か。三カ月もこの布だけと向かい合っていれば、僕だつて多少変になるな」

「美人なのよ、その織子。下地燿子しもじゆこつて言うの。ただ、ちよつとね……」

八重の言いよどむ気配に、隆三は引きこまれた。

「ともかくこんな見事な色づかいは、これまでの宮古上布ではなかなかなかったわね。燿子ちゃんがこの縞柄を思いついたのは、海の上から島を眺めたときだったらしいの。小舟の上から与那浜を見たら、そのとき偶々目が涙でいっぱいになってたので、海と砂と浜昼顔とモクマオウの林が、こんな縞に見えたんですって」

隆三は、手にした着尺を横にして、そこに海と砂と浜昼顔とモクマオウの林を見ようとした。

「涙でにじむと、もっとそれらしく見えるのかな。少女の感傷が、これを作り出したわけだな」

八重は唇の端を歪め、何か言おうとして諦めた。だがしばらくして、再び口を開いた。

「……問題があるつて言つたのは、自殺癖のことなの……このときも死ぬつもりで、小舟で出たらしいの。島の男の子を誘つて、その男の子と小舟の中でセックスしたあと、最後に島を見ときたいと目を上げたら……」

「こんなふうに、見えたわけか」